

小林一三の功績

阪急電鉄の創設



©阪急電鉄

明治40(1907)年に箕面有馬電気軌道の設立に参画。「地域開発事業としての電鉄」という私鉄経営モデルの原型をつくり上げた。

鉄道沿線の先進的な宅地造成開発



©阪急電鉄

箕面有馬電気軌道の開通に先立ち、線路通過予定地の沿線土地を買収。宅地造成開発を行い、明治43(1910)年から日本初の住宅ローンによる分譲販売を行った。

日本初のターミナル・デパート



©阪急電鉄

路線の起点となる梅田駅にターミナルビルを建設し、昭和4(1929)年「阪急百貨店」を開店。新しいスタイルの百貨店は、世界恐慌のさなかでも多くの客を集めた。

プロフィール

- 明治6(1873)年…巨摩郡河原部村(現韮崎市)の商家に生まれる。地元の公立小学校韮崎学校を卒業後、慶応義塾に入学。卒業後は三井銀行に入学。
- 明治40(1907)年…箕面有馬電気軌道の設立に参画。
- 大正2(1913)年…宝塚歌劇団の前身となる宝塚唱歌隊を創設(昭和15年宝塚歌劇団に改称)。
- 昭和2(1927)年…阪急電鉄社長に就任。
- 昭和8(1933)年…東京電灯(現東京電力)社長に就任。
- 昭和12(1937)年…東宝映画を設立。
- 昭和15(1940)年…第二次近衛内閣の商工大臣に就任。
- 昭和20(1945)年…幣原内閣の国務大臣に就任。
- 昭和32(1957)年…84歳で永眠。

温泉場の余興として生まれた少女歌劇

大正2(1913)年、小林一三みのおは箕面有馬電気軌道(現・阪急宝塚線)の宝塚駅に設けた娯楽施設、宝塚新温泉への誘客を狙い、余興として「宝塚唱歌隊」(宝塚歌劇団の前身)を創設した。

当時、大阪三越で人気を集めていた少年音楽隊からヒントを得たもので、こちらは唱歌を歌う少女を募集。第1期生として16人の少女が合格した。「やるならば一流の歌劇団を」と考えていた小林は、団

員を厳選し、一流の指揮者や作曲家などを招いた。小林はのちに「温泉場の余興として生まれたとはいふものの、日本劇壇の一つの新分野を開拓するものであった」と当時を振り返り語っている。

オリジナルの脚本で新しい舞台芸術を確立

洗練された歌、踊り、芝居を統合したオペレッタや、ミュージカル風のレビューショーは、世間でも大きな話題となっていた。小林はその後も多くの脚本家や演出家などを招いてオリジナル作品を作

り上演。中でも昭和2(1927)年公演の「モン・パリ」はわが国最初の本格的なレビューとして高い評価を得た。また昭和5(1930)年から公演が始まった「パリエット」の主題歌「すみれの花咲く頃」は若い女性たちに歌い継がれ、熱狂的な宝塚ファンが生まれた。

文学を志した青年自ら脚本も手がけた

学生時代に文学を志していた小林は、当時山梨日日新聞や上毛新聞で小説を連載していたこともある。そんな経験から、劇団では自ら

シナリオを書き、曲をつけることもあった。

劇団の創設間もないころの公演の最中、指導者が次回公演の楽譜を持って姿を消した。困った小林は自分で手がけるようになり、「紅葉狩」「村雨松風」をはじめ十数本の脚本を残している。劇団が軌道にのってからは自ら筆を執ることはなかったが、温かく見守り続けた小林。彼がつくり上げた宝塚歌劇団は、今や団員数約430人、年間観客動員数260万人を誇る日本屈指の大劇団へと成長し、人々に夢や希望を与えている。

〈記事監修〉山梨大学 教育人間科学部教授 齋藤康彦

やまなしの偉人たち 第2話

宝塚歌劇団をつくり上げた 韮崎出身の実業家 小林一三



©阪急電鉄

鉄道を起点とした都市開発モデルを生み出した、阪急グループ創業者

こばやし いちぞう 1873年～1957年
小林一三

創設から100年近くたった現在も、宝塚歌劇団は多くの人々に夢を与え続けている。



©宝塚歌劇団

阪急電鉄をはじめ、日本初のターミナル・デパートや東宝映画の設立など、数々の事業を立ち上げ、「夢」を追い続けた小林一三。その夢のひとつ「宝塚歌劇団」は、時代を超えて今も多くの人に愛され続けている。